

大学や研究機関による技術展示も併設され、また、15日の夕刻には展示会場においてレセプションが行われた。会場の広さや雰囲気も申し分なく、展示を見ながらのレセプションは新しいスタイルとして好評であった。

一般に、学会における企業展示では研究者と企業との交流があまり活発でない場合が多いが、今回は2日間とも常時盛況であった。特に、参加者のほぼ半分が海外からの参加であったこともあり、海外の研究者が展示内容を体験した後、企業説明員に熱心に質問をしている光景が数多く見受けられた。出展企業側からも、世界のVR研究者へのPRと交流が行えて非常に有意義であったとの意見が多数寄せられた。21世紀の幕開けに日本で初めて開催されたIEEE-VRとして、それに相応しい企業展示であったと感じた次第である。



Exhibits & Research Demonstrations

◆技術展示担当

北村喜文

大阪大学

Research Demonstrations (技術展示) は、最新のVRに関する研究成果を見て触って感じることができるデモンストラーションの場として、毎年、楽しみにしている参加者も多い。実際、レベルが高くておもしろいデモが多数集まると、それだけで会議全体が「盛り上がる」という面もあり、IEEE Virtual Reality では毎年、重要なプログラムの1つとしての地位を占めてきた。

今年のIEEE VR 2001におけるResearch Demonstrationsは、3月15日(水)と16日(木)の2日間に渡って、Exhibits (企業展示) と同一会場で開催した。Exhibits は完成されたVR関連製品を展示してもらう場であるのに対し、Research Demonstrations は、さまざまな研究機関から、製品としてみれば未完成な部分はあるかもしれないが、将

来の発展可能性を秘めた技術に関する研究成果を発表してもらい、世界中の参加者と議論を深めてもらう場である。今回は、応募があった中から、次の創意溢れる5件のデモが展示された。

* Mobile 3D City Info (フィンランド Tampere University of Technology)

* Passive Force Display Using ER Brakes (大阪大)

* Virtual Sound Environment Reproduction Synchronized with interactive VRML application (NHK 放送技術研究所)

* Real Objects with Virtual Texture on A MR Table -Projection Based Mixed Reality- (大阪大)

* Getting Your Hands Wet with Water - Virtual Liquid Manipulation Using Vessel (名古屋工大)

また、これら5件に加えて、第8回「学生対抗手作りバーチャルリアリティコンテスト」(IVRC 2000) の手作りVR部門で優勝したVirtual Chanbara (東京大学 ARIEL) を招待した。フライホイールを用いた力覚提示装置つきの刀などアイデア溢れるシステムでチャンバラを体験できるデモは、多くの外国からの参加者も楽しんでいたので、本会議を大いに盛り上げてくれた。15日の夜には、Exhibit Reception が開催され、多くの会議参加者がResearch Demonstrations に集まった。また、会場内にはインターネットコーナーが設置され、常時多くの人が集まっていた。

Research Demonstrations もPaper (論文) など他のカテゴリと歩調を合わせてCall for Participationなどで募集したが、これに加えて、Paperの採否のnotificationの期日の直後(2000年11月10日頃)に、acceptされた人は口頭発表だけではなくデモも使って効果的なプレゼンをしてもらうため、また残念ながらacceptされなかった人には何とかして会議に参加する口実を確保してもらうため、Research Demonstrations への応募を勧誘するメールを、paperの投稿者全員にその採否に関わらず送信した。

Research Demonstrations への出展料は無料で、机、椅子、パネル、電源、必要に応じてインターネット接続口は、IEEE VR 01側から提供した。一方、デモンストラーションに必要な機材は原則として出展者が自己責任で用意して持ち込ませることとした。しかし、海外の研究機関から出展を支援するため、可能な限り機材調達などの面で協力することとした。実際には、海外から応募があった3件全てを採択する方向で調整を進めたが、装置の特殊性などから、提供を求められた機材の全てをレンタル品などで用意することは困難であったため、結果として米国からの2件の応募に対しては期待に添うことができず、参加を諦めてもらわざるを得なかったのは残念であった。

バーチャルリアリティは体験してみて初めてその価値が

正しくわかるという性格のものであるため、デモンストレーションは極めて重要である。最近のSIGGRAPHのEmerging Technologiesなどでも日本のVR関係研究機関からのデモンストレーションでの活躍が顕著であるが、今回のResearch Demonstrationsでも、日本のVR系デモのレベルの高さを、諸外国の参加者に再認識させることができたのではないかと考える。

貴重な研究成果をデモンストレーションとして見せてくださった方々、会場の調整などにご協力いただいたExhibits担当の伊藤一男様、澤田一哉様、その他、関係の皆様へ感謝いたします。



Exhibits & Research Demonstrations

◆出版担当

竹村治雄

大阪大学

出版担当としての業務は、事前プログラム、ファイナルプログラムの作成と編集、プロシーディングスの出版社選定と編集業務の橋渡し作業が主な業務である。これらについて、作業内容を簡単に紹介する。

まず、事前プログラムおよびファイナルプログラムに関しては、VR2000ではIEEE CS Pressが編集作業を行ったようであるが、アメリカで印刷して日本に輸送する時間差を考慮するとCS Pressは使用できないとの結論になり、CS Pressから昨年のDTPデータのみ貰い受けて国内での編集と印刷を行うこととした。尚、DTPデータはQuark Express（英語版）を利用して作成されていたので、新たに同ソフトウェアを購入して作成した。またDTPデータはVR2002の委員会にも引き継ぐ予定である。尚、プログラムは今回のカンファレンスカラーであるグリーンと黒の2色刷りとした。

次に、プロシーディングスの出版であるが、IEEE Computer Society単独での開催ではComputer Society Press（CS Press）がプロシーディングスを出版している。今回もVR

学会側での出版のための体制がまだ整っていないことや、英語での出版であることを考慮してCS Pressに出版費用の見積もりを最初に依頼した。その結果、アメリカからのプロシーディングスの輸送費用を考慮しても十分魅力的なコストでのプロシーディングスの作成が可能であることがわかった。また、CS Pressでの出版であれば、IEEEのDigital Libraryにも自動的に登録され、事後のプロシーディングスの流通も良いことを考慮した結果、出版をCS Pressに全面的に委託することとした。委託に関する契約は、CS PressとPublication Chairとの間で8月に交わした。その後、採択論文が決定されると著者とのやり取りはCS Pressが直接担当し、PostScriptファイルによる原稿の受け渡しが行われ、非常に効率よく編集作業が進んだ。出版担当の業務としては、各チェアからプロシーディングスの序文の原稿の収集、論文掲載の順序、各委員のリストのCS Pressへの引渡し、最終的な編集結果の確認等を行った。

ただ、残念なことにパネル討論のセクションに掲載されるはずであった、各パネリストのポジションペーパーの原稿が、CS Press側のミスで掲載されず、パネル討論のアブストラクトのみの掲載となってしまった。この点については、CS Pressも責任を認めているが、ミスが判明したのが印刷終了後だったため、修正ができなかった。CS Pressの話では、Digital Libraryへは正しいものを掲載することである。関係者各位には改めてお詫び申し上げます。

◆WEB担当

野間春生

(株)ATR 知能映像通信研究所

IEEE-VR2001の実質的なフロントエンドであるWeb関連の業務の全般をWEB Chairとして東京大学の稲見氏と共に遂行いたしました。

昨今のネットワーク状況と、本会議自体が初めてのアメリカ国外での開催と言うことで、当初から論文投稿、査読、参加受付の全ての処理をWebにて行うことが決定されておりました。しかし、大きな会議のようなプロによるシステムではなく、あくまで私たち実行委員のお手製のWeb環境での運営が前提であり、これを受けてWeb Chairではwww.vr2001.orgのドメインを取得し、東京大学内にサーバーをおきつつ、これを東京大学とATRよりメンテナンスする環境によって運営いたしました。運営中に不具合や誤記の指摘を何かと頂きつつも、論文受付・査読で